

月例研究会（2021年12月25日）

「投書階級」とは誰か

—昭和期川口市の一主婦の
生きづらさと投書

金子 龍司

拙著『昭和戦時期の娯楽と検閲』（吉川弘文館、2021年）において、報告者は戦時期に「投書階級」と呼ばれた人々が新聞などに大衆娯楽を問題視する投書を繰り返し、内務省や警視庁がこれに応じて取締の強化を講じていたことを指摘した。しかし、「投書階級」がどのような人々であったのか分析はできていなかった。

今回の報告は「投書階級」の具体例として、『朝日新聞』の戦前期の女性投書欄「女性の声」、戦後の「声」、『読売新聞』の「気流」などに投書をしまくった川口市の主婦大塚美保子（1914- ?）の動静を追い、投書の動機や投書者の人生における投書の意味を検討した。

戦前期の『朝日新聞』への投書は購読者数の1%に満たないごく少数の人によって担われていた。またその内容は、否定的・攻撃的な傾向が強かったことに特徴があった。

このなかで大塚は、1938年から投書を開始し、以後60年以上の間に新聞・雑誌への投書、寄稿など170篇以上の著述を残した。

大塚は1914年奈良県出身。軍人の父を持つ家に生れ、東京府立第三高等女学校（現在の都立駒場高校）卒業後、1934年にのちのNHK川口ラジオ放送所長などを務める大塚静夫と結婚し、専業主婦として二子の母となった。

大塚が投書を始めたのは静夫の影響が大きかった。大塚は生涯にわたり「生きがい」にこだわりを持ち、結婚後に教育や資格取得の機会を得ることを欲した。しかし、「化粧でもしてもつと家庭的であつてほしい」（原文ママ）とする静夫に自己実現を阻まれ、静夫が許容する投書や読書に捌け口を見出すこととなった。

戦時期の大塚の投書には、女性の主体化や自立を求め、そのための意識改革を求めるものが

目立った。たとえば嫁入りを人生最大の目的とすることは間違っているとか、裁縫教育や洋裁は時間の無駄でしかなく、美服に憧れる人間の内容は脆弱であるとかであった。同時期には女性の社会進出や物資不足を補うための家庭生活の工夫を通じた戦時体制への貢献が求められており、こうした風潮に適合するものだった。

敗戦直後は食うに追われ生活に追われる辛く惨めな主婦の疎外感と承認要求を主張した。生活が落ち着くと、今度は女性の主体化や自立を妨げるものを見つけ出して攻撃する論陣を張った。それは婦人雑誌だったり、ラジオ番組だったり、扶養控除手当だったりした。そしてそれらを楽しむ女性の意識の低さも槍玉に挙げた。

一方で、売春婦や浮浪者など社会的弱者には冷淡で、大塚自身も敗戦直後にはギリギリの生活を送ったにもかかわらず、彼らに対しては生理的な拒絶や恐怖を示した。

60年代以降は、交通事故の増加を背景に、子どもの死亡事故に係る母親の責任の糾弾や、物価抑制や環境問題との関連でムダを省いた質素な生活の工夫を提言することが目立った。

総じて大塚の投書には、終戦間際から敗戦直後までの一時期を除き、女性の主体化、自立を訴えつつ、それを妨げる女性の意識の低さを攻撃する議論が目立った。ただし、批判は中流以上の女性に向けられており、社会的弱者は批判の俎上にも上らなかった。これらから窺えたのは、結婚後、ジェンダー規範により自己実現を阻まれた女性が、捌け口とした投書において新たな抑圧を生みだしたり既存の亀裂を承認してしまったりしていた構図であった。

討論では、参会の方々から、大塚の議論には同時代的な独自性は見出しがたいこと、掲載紙の許容範囲ギリギリの線を突く極端さも窺われること、雑誌投書欄に見られたような、投書者同士の連帯への志向が希薄であること、個別の投書を比較すると主張に矛盾が見られることなど、貴重な指摘を賜った。衷心より感謝申しあげるとともに、論文化に向け活かしきりたい。（かねこ・りょうじ 法政大学大原社会問題研究所嘱託研究員）